

( 続紙 1 )

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	伊東さなえ
論文題目	災害とローカリティ —ネパール・ゴルカ地震に対応する人々の民族誌的研究—		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、2015年にネパールで発生したゴルカ地震への人々の対応について論じたものである。特に震災の際に人々の帰属の対象がどのように複数的・重層的に表出したかを論じている。本論文は直接的には2014年から2018年にかけての347日間のフィールドワークにもとづくが、それ以前の2011年から2013年にかけての2年間、著者が青年海外協力隊員としてネパールのカトマンドゥ盆地に位置するキルティプール市の環境改善プロジェクトに関わった経験もいかされている。</p> <p>序章において災害に関する文化人類学的な研究について検討したあと、第I部では震災以前のカトマンドゥ盆地の状況を論じ、第II部では震災後を論じる。第1章では、ネワールというカトマンドゥ盆地に古くから住み着いてきた人々の社会と文化について概観する。第2章ではネワール社会における廃棄物処理という現代的課題をめぐる実践について論じる。ネワール社会の都市や村は、寺院や城壁、カーストごとの集住といった慣習などにより空間構成が決定されてきた。人的なつながりは土地にまつわるものと、親族にまつわるものという二つの関係性を中心に形成されてきた。他方、近代化や開発のプロジェクトを通して、それらとは異なるつながりが生まれ、帰属意識も重層化してきた。</p> <p>第II部では、地震への対応が描かれる。第3章では、震災の発生とその後の展開について、ネパール国家全体のレベルから分析し、政府と人々の双方からナショナリズムが高揚したありさまを記述する。「われらすべてネパール人」という感覚の高揚は、ボランティアや助け合いを促す一方、多文化主義・地域主義にもとづく運動を抑圧するはたらきもした。またこの章では、被災地における地域・個人による援助の格差についても論じられている。第4章と第5章では、具体的なカトマンドゥ盆地内の村の事例をもとに、災害に際してどのような対応が行われたかを詳細に検討している。第4章では、震災後にローカルな空間構成がどのように揺らぎ、どのように再生されたかについて、震災の瓦礫と、瓦礫処理のきっかけとなった死者追悼の祭礼に着目しながら論じている。第5章では、被災者たちの災害対応が、震災以前から存在していた多様なつながりに基づくものであると同時に、新たな関係も創出していたことを論じる。国外在住者たちも、村の内部で被災した人々も、それぞれの言葉で被災地について語り、その語りに基づいて人を集め、つながり、活動を立ち上げた。そこで使われたのは、具体的な村の名称だけではなく、行政市や地区の名前や、民族名や、友達や</p>			

学校の名前である。女性同士でつながるという語りをを用いてNGOからの援助を得るなど、グローバルな市民社会への接続も試みられた。近代化の中で登場した地区や女性グループ、学校などの枠組みは、緊急支援の参照点として機能し、つながりの形成に寄与した。

終章では、震災への対応に際して、しばしば「被災コミュニティ」や「地域社会」のレジリエンスという言葉で括られるものが、古くからある地縁や親族ネットワーク、近代化のなかで作られてきた様々なカテゴリー、新しい情報テクノロジーなどかさなりあう資源を人々が活用するなかで立ち現れていると論じる。